

農業と科学

1978

1

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO LTD



ユニークな技術を駆使し

当面する難局の打開へ

チッソ旭肥料株式会社
代表取締役・副社長

中村 治文

明けましておめでとうございます。新年に当りご挨拶申し上げます。

昨年は、あらゆる面で厳しいことの連続でありました。農業経済もその例外ではなく、水稻転作問題をはじめとする、基本的な構造変革がはじまりました。

もともと農業経済は、一国の経済の基本であり、その安定なくしては、一国の存立もまた危うしといわれますが、その農業と一体的な関係にある肥料工業もまた、大きく揺れる動乱期に入りました。

農業が、米作脱皮の構造変革を迫られるならば、片や肥料工業も国際競争力の喪失に伴う、アンモニア設備、磷酸設備の一部休・廃止をはじめとする、生産構造の変革を余儀なくされようとしております。

転作問題、B B肥料、輸入磷酸、ナフサ高、円高……等々、問題は極めて多彩ですが、いずれも深く構造問題に根ざしたものであり、昨年がその幕あきだとすれば、本年はいよいよ本舞台となりそうです。

その意味で、本年は一層厳しい年となりそうでありませう。このような、いわば転換期に当りまして、事態に正しく対応し、肥料工業に課せられた使命をよく果し得るためには、今いちど、肥料の原点にたち帰って考えてみるが必要でありませう。

肥料の進歩は、人類の食糧確保に大きく貢献してきました。肥料の進歩とは、良い肥料を安く供給することだとも云えませうか。

そうして良い肥料とは、天然のサイクルをこわすものではなく、それを助けることによって、より効果的なものにするとということでしょうか。

そうだとすれば今日、全国各地で推進されている「土づくり運動」は、肥料の多投に対する反省でありませう。

当社では、既にご承知の通り、多投しなくてもよい肥料、多投しても天然のサイクルをこわさない肥料として、「CDU」、「コーティング肥料」を開発して参りま

した。

おかげ様で、皆様のご理解と認識を賜わり、地道ではありますが、着実に普及の輪を広げてきております。

肥料の研究は、光、水分、温度、土質、微生物……等々、自然界のあらゆる要素と深い関係を持っており、いわば自然界の神秘への、絶えざる解明努力の積み重ねであるかと思ひます。

当社の富士研究所、当社の母胎であるチッソ(株)、旭化成(株)それぞれの研究部門が、一体となつてとり組む研究体制は、必ずや「良い肥料」を皆様にお届けできるものと、自負いたしております。

さて、全面的に原料を輸入に頼らざるを得ない我が国の肥料工業が直面している構造問題は、まことに厳しいものがあります。

ナフサ高、円高の環境の中で、原料産出国から入ってくる二次製品に対抗して、肥料工業が、かつてのアンモニア大型化のように、もう一度、国際競争力をつけることが要請されております。

この問題は、国の産業政策を背景としながらも、単に設備の大型化といった手段だけでは、すまされないものを含んでおります。

結局、すぐれた生産技術と、原料の多角的利用による副産物、回収等を手段としていく以外に、途はないのではなからうか……と思ひます。

その意味で、当社の基盤である富士工場、戸畑工場、水俣工場、延岡工場は、それぞれユニークな化学技術を駆使した事業を展開しており、その条件には大へん恵まれていると申せませう。

当社は、良い肥料を安く供給するため、研究、生産の両面で、その原点を見つめながら、当面する転換期を乗りこえるため全力をつくす所存であります。どうか、本年もよろしくご指導、ご鞭撻下さいますよう、お願い致します。

いささか蕪辭を述べ、新年のご挨拶といたします。